

小児・AYA世代がんについての認知度調査 (東京都食育フェア2022)



日本女子大学

寺内 恵美子^{1,3}, 鈴木 知沙菜², 内田 杏子², 吉野 友実子², 石井 佑果², 小山 はるな², 大泉 玲奈², 町田 心², 緒形 友里¹, 佐藤 彩^{1,4}, 浦尻 みゆき³, 鈴木 礼子²

所属: 1.日本女子大学大学院家政学研究所, 2.日本女子大学家政学部食物学科, 3.神経芽腫の会, 4.東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科

1. 背景

小児・AYA世代がん経験者は治療後も様々な課題に直面している。その現状を社会の理解が進むために周知していく必要があるが、「AYA世代」の言葉の意味や小児・AYA世代がん経験者の多くが抱える困難について、社会的な認知が進んでいないと考えられる。

2. 目的

小児・AYA世代のがん患者の課題について情報提供および周知活動を行い、並行してその認知度を横断的に調査し、今後の小児・AYA世代がん患者の啓発・支援活動に役立てることを目的とした。

3. 方法

調査日時: 2022年11月12日、13日
 場所: 代々木公園ケヤキ並木通り
 調査対象者: 2022年度東京都食育フェアの本学ブースに来場され、アンケート参加に同意された一般の市民の方々

2022年度東京都食育フェアにおいて小児・AYA世代のがんについて一般の方へわかりやすい媒体を作成・紹介して啓発活動を行った。また、並行してブース来場者へ自記式アンケートによる小児・AYA世代のがんに関わる、以下4点の情報の認知度について横断的に調査した。

質問項目は以下の通り。

- ①「AYA世代」という言葉の意味
- ②治療後の晩期合併症の可能性があること
- ③希少疾患であるために治療開発が遅れていること
- ④小児がんは約7～8割が治ると言われていること*

統計解析は対象者の属性別(性、年代)にJMP PRO ver.14を用いて検討した(統計学的有意水準 p<0.05)。本研究調査は日本女子大学の倫理委員会の承認のもと、実施された。
 ※参考資料: 国立がん研究センターがん情報サービスHP https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/sum

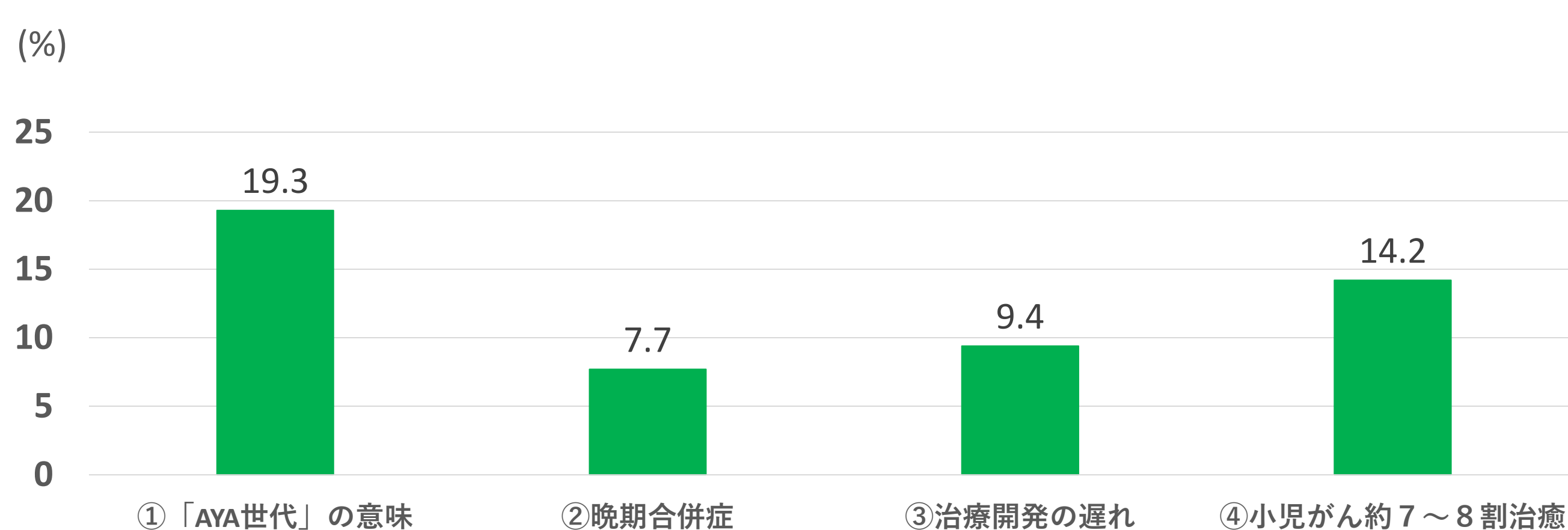
4-1. 結果 (対象者の属性)

アンケート参加に同意した640名のうち、年齢・性別を含め回答した597名(男性169名、女性428名)を対象とした。

表. 対象者の属性 (n=597)

	20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	計(名)
男性	4	13	28	46	39	24	15	169
女性	27	63	81	101	73	40	43	428
計(名)	31	76	109	147	112	64	58	597

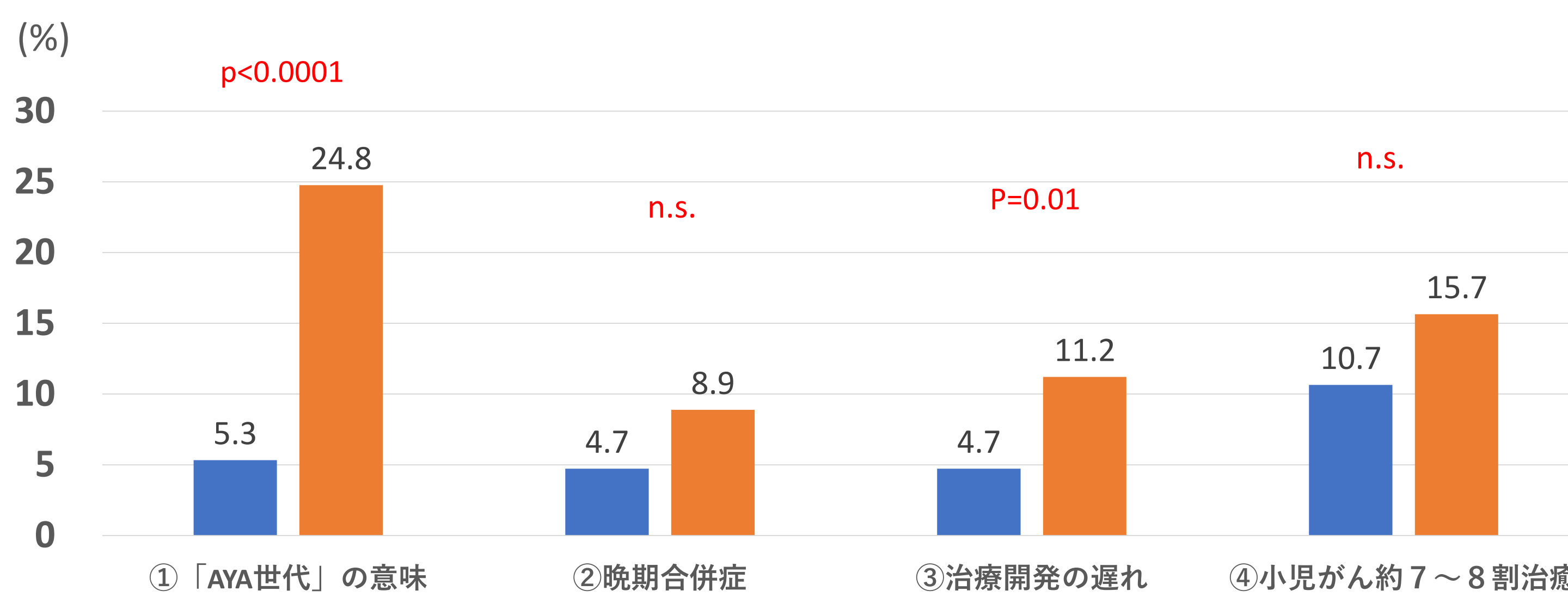
4-2. 結果 (全体の認知度)



【図1】全体の認知度 (n=597)

◆ いずれの項目も認知度は20%に満たなかった。

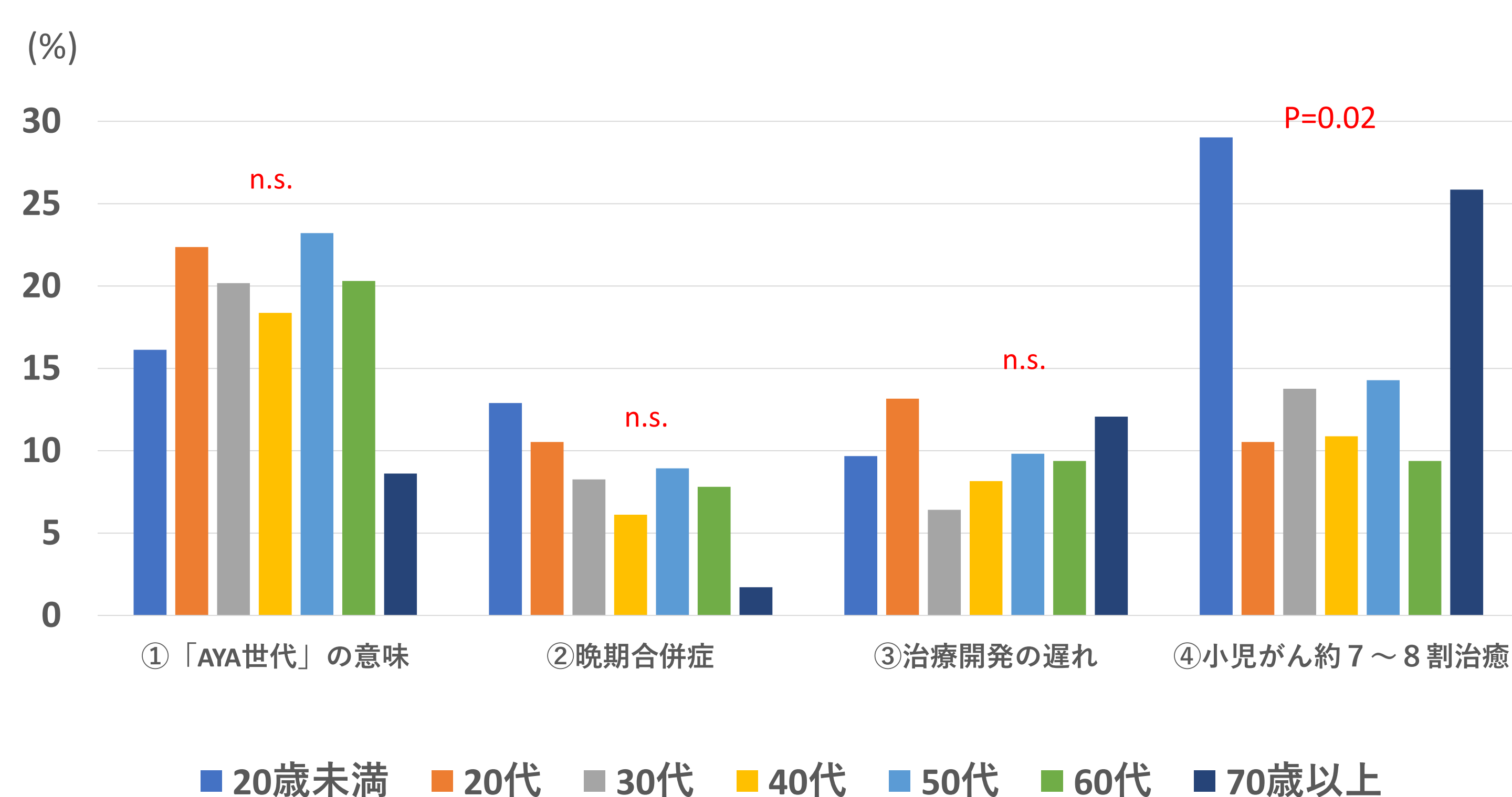
4-3. 結果 (男女別の認知度)



【図2】男女別の認知度 (n=597)

◆ 質問項目①と③で男性に比べて女性が統計的有意に認知度が高かった。

4-4. 結果 (年代別の認知度)



【図3】年代別の認知度 (n=597)

◆ 質問項目④で統計的有意差が観察された。20歳未満と70歳以上で他の年代よりも認知度が高かった。

5. 考察

◆ ①「AYA世代」という言葉の認知度

2019年に実施した調査と比較すると、全体の認知度は、2019年度は12.1%、2022年度は19.3%であった。AYA weekは2021年から開始されており、AYA weekの活動が認知度向上に繋がった可能性が考えられる。男性の認知度は2019年度(7.3%)、2022年度(5.3%)と増加は認められず、1割未満であった。

しかし、女性の認知度は2019年度(14.1%)、2022年度(24.8%)と統計学的に有意な増加が認められた。(P<0.0001)

◆ ①～④全項目で男性より女性の方が認知度が高かった。

◆ 治療を終えて社会に出ていく小児・AYA世代がん経験者は、晩期合併症などを含めた様々な課題に直面しているにもかかわらず、いまだ全体の認知度は①～④全項目で2019年度、2022年度共に2割未満であった。

◆ 社会全体で支援する体制を作り上げていくために、今後もこのような啓発活動を継続し、できるだけ多くの方に知っていただくことが必要と考える。

【謝辞】 株式会社Mizkan 後援/神経芽腫の会